# 未来へと続く道・トンネル

八東小　六年　青木　瑛子

私達は、県の水泳大会に参加するため、国道九号線を通って県中部の北栄町へ向かった。

その途中、トンネルを通るたびに、どれだけ長く息が止められるかを友達と競い合いながらバスにゆられていた。そのうちに、トンネルはどのようにつくられたのだろう、という疑問がふとうかんだ。

後日、中国横断自動車道姫路鳥取線の工事現場でトンネルがほられていることを知り、早速工事を見学させていただくことになった。

工事現場に着くと、まず、バッチャープラントというコンクリートを練る大きな設備が目に入った。その他に、トンネルをほる時に出る大量の水をきれいにするだく水しょ理し設や、どろを土のようなかたまりにしてしまうだっ水しょ理設備もあった。トンネル工事といえば穴をほり進めることしか考えられなかったが、周辺の環境や生き物へのえいきょうなど、社会全体のことを考えて行われていたということを、初めて知った。

そして、いよいよトンネル内へ足をふみ入れた。すると、大きなくっさく機が目にとび込んできた。この機械の先たんが上下左右に動き、トンネルをほっていくのだ。その時に出る土や岩は、ホイールローダーでダンプトラックに積んで外に出す。次に、せっかくほったトンネルがくずれないように、コンクリートを吹き付けて固める。それから、わくを組み立てたり、長いぼうを山に打ち込んだりしてほ強する。さらに、山の中の水がトンネルの中に入らないよう防水シートを張り、トンネルの表面にコンクリートを打って仕上げていくという説明を聞き、工程の複雑さと最新の技術におどろいた。

トンネルをほる作業は、昼夜を問わず命がけで行われ、たくさんの困難を乗り越えながら進められていることが伝わってきた。工事現場のみなさんが、トンネルの完成まで安全第一で工事ができるように願った。

そして、この春、ついにトンネルのかん通式が行われると聞いた。たくさんの人の願いと努力によって、ようやく完成するのだ。あのうす暗かったトンネルの向こうからは明るい光が差し込み、完成を祝うたくさんの人の笑顔が思いうかんでくる。いつかこのトンネルにつながる新しい道もできて、交流が進み、私達のくらしを支えてくれることだろう。トンネルの向こうは私達の明るい未来へと続く。